

ライフスタイルの確立に関わる 小児期の心理発達の要因の検討

(分担研究：健康的なライフスタイルの確立に関する研究)

大石 昂

要約：小児期からの健康的なライフスタイルの形成という問題においては、心理発達の要因についても考慮する必要がある。心理発達の要因とは、基本的にはパーソナリティ形成に関わる問題である。本研究においては、小児期において未だ形成途上にあるこの特性及びこの形成に重要な影響を及ぼす親の養育態度について継続的に研究、調査を進めていくための質問項目の作成を試みた。その結果、社会的向性、情緒的コントロール、動機づけの強さ、自律のそれぞれに関する4つの項目が作成された。

見出し語：社会的向性、情緒、動機づけ、自律、欲求不満耐性、パーソナリティ、養育態度、富山スタディ

はじめに

成人病を予防するための長期的視野に立った方策として、健康的なライフスタイルを確立することが重要な課題となりつつある。しかしこのライフスタイルは、生活習慣、食物の嗜好等を例に見ても分かるように、成人してから初めて形成されるものではなく、すでに小児期からの発達過程を経て徐々に形作られるという面が大きい。さらに見方によっては、両親や地域社会のライフスタイルを意識的・無意識的に取り入れることも考えるならば、それは個人を越えた歴史的側面を持っているとさえいえよう。

このように個人のライフスタイル形成に関わり

をもつと考えられるものは、生理的要因だけでなく、心理発達の要因、社会的要因など多方面にわたっていると考えられる。

富山スタディは、富山医科薬科大学保健医学教室が中心となって、富山県厚生部と富山県医師会及び関連分野の研究者の協力のもとに行われるもので、今回は、富山県内の平成元年度（1989年4月2日～1990年4月1日）生まれの小児（調査時点では3歳）を対象にした「お子さんの生活習慣ならびに家族歴アンケート」の実施等を内容としている。このアンケート調査は、子どもの生活習慣に関する部分（30項目）と家族の健康に関する部分に分かれている。

富山大学教育学部幼児心理学研究室

(Dept. of Infant Psychology, Faculty of Education, Toyama University)

しかしこのアンケート調査の子どもの生活習慣に関する部分は、主として食事や間食に関する質問で構成されている。したがって、今後、健康的なライフスタイルの形成に関わる小児期における心理発達の要因を調査し、実態を把握するためには、新たにこれらの要因について検討し、調査のための項目を作成することが必要とされる。

本研究では、これらの諸要因のなかから、生理的要因に次いで特に深い関わりを持つと考えられる心理発達の要因について考察し、今後行われるフォローアップスタディの幼児、児童段階における質問項目を決定することが主たる目的となっている。

方法と手続き

(1) アンケート調査

これからの質問項目を決定することを主目的として、アンケート調査を実施、その結果によってさらに項目を絞り込む方法を採用した。この第1次のアンケート調査の項目は、以下に述べる考察を通して作成した。

健康的なライフスタイル形成に関連すると考えられる小児期における心理発達の要因とは何であろうか。

第一に考えられるのは、パーソナリティとその形成に関わるものである。これに関連するものとして、成人期における心臓疾患と関連しているとされているパーソナリティのタイポロジーとしての「タイプA、タイプB」はあまりにも有名である。

ここではまず、社会性に関する要因を取り上げなければならない。社会性(社交性、協調性、社

会的向性)は、将来にわたって、個人のライフスタイルをいろいろな面にわたって規定していくと考えられるからである。

また、さまざまなストレスに対処する能力は、成人期における健康と深く関連を持つものであろう。この能力の形成に関わると考えられるパーソナリティ因子は、情緒の安定性、動機づけ、欲求不満耐性などである。

さらに、健康的な生活スタイルは、自分の生活の自己管理能力にも関わっているであろう。この意味で、小児期における生活習慣の自律の形成も重要な因子と考えられる。

これらの考察から、パーソナリティ要因として、社会性、情緒易変性、達成動機、欲求不満耐性、自律という5つの因子を取り上げることとした。

これらの5つの因子に関わる質問項目として、まず、「幼児・児童性格診断検査」(高木俊一郎、坂本竜生)及び「YG性格検査(小学2年~6年生用)」(辻岡美延、安藤照子、園原太郎)を参考にしながら、それぞれ5つずつ、合計25作成した。

これらの25の質問項目は、相互に類似したものもあるため、整理して最終的に以下に述べる23の質問項目を決定した。

①社会性に関する項目

Q101 友だちはできにくいほうですか

Q102 近所の人や先生などになじみにくいほうですか

Q103 仲間に入るよりも、友だちのすることを見ているほうですか

Q104 外に出るより、自分の家にいることが好きなほうですか

②情緒易変性に関する項目

- Q105 寝付きは悪いほうですか
- Q106 憶病なほうですか
- Q107 怒りっぽいほうですか
- Q108 神経質なほうですか

③達成動機に関する項目

- Q109 負けず嫌いなほうですか
- Q110 せっかちなほうですか
- Q111 熱中しやすいほうですか
- Q112 興味が変わりやすいほうですか
- Q113 マイペースなほうですか

④欲求不満耐性に関する項目

- Q114 自分でうまく気分転換ができるほうですか
- Q115 ちょっとしたことでも不平を言ったりするほうですか
- Q116 わがままで扱いにくいほうですか
- Q117 留守番など、一人にされるのをいやがるほうですか
- Q118 言い出すと聞かないほうですか

⑤自律に関する項目

- Q119 夜は、言われないと寝ないほうですか
- Q120 出かけるときなど、せかされないと支度できないほうですか
- Q121 テレビなど、放っておくといつまでも見ているほうですか
- Q122 遊んだ後は、自分でだいたい片づけるほうですか
- Q123 飲食物などが置いてあると、勝手に食べてしまうほうですか

これらの23個の質問項目のそれぞれについて、「0 全くそうである」「1 どちらかといえばそうである」「3 どちらともいえない」「4 どちらかといえばそうでない」「5 全くそうでない」の5つの尺度に○をつけさせる形式で調査用紙を作成した。(数字は尺度得点)

次に問題となるのは、子どものパーソナリティ形成の特に重要な環境要因としての育児態度である。

この育児態度に関わる質問項目は、上に述べた5つのパーソナリティ因子と関わらせて、次の7項目を決定した。

- Q201 欲しがると結局与えてしまうことが多いですか
- Q202 親の気分次第で叱ったりすることが多いですか
- Q203 競争には負けさせたくないと思いますか
- Q204 家族の団らんや会話を大事にしていますか
- Q205 何事につけ、子どもの意思を尊重するようにしていますか
- Q206 お手伝いをさせるようにしていますか
- Q207 育児に積極的に参加するほうですか

また、育児態度が両親のそれぞれによって異なっていることも考えられるので、その様子を知るために、父 (FA) と母 (MO) のそれぞれについて回答欄を設け、「0 全くそうである」「1 どちらかといえばそうである」「3 どちらともいえない」「4 どちらかといえばそうでない」「5 全くそうでない」の尺度上に○をつけさせる形式とした。

さらに子どもの生活の実態を把握するために、テレビ視聴をとりあげて次の質問項目を作成した。

Q301 テレビを見ながら食事をすることがありますか

- ア ほとんどいつもそうする
- イ ときどきそうする
- ウ ほとんどそういうことはしない

Q302 お子さまのテレビの見方について決まりがありますか

- ア 決められた番組だけを見せるようにしている
- イ 決められた時間内で見せるようにしている
- ウ 特に決めていない

Q303 お子さまはふだん（平日）1日どれくらいの時間テレビを見ていますか

- ア ゼロ
- イ 1時間未満
- ウ 1時間－2時間
- エ 2時間－3時間
- オ 3時間－4時間
- カ 4時間以上

Q304 お子さまはふだん（平日）1日どれくらいの時間ファミコンをしますか

- ア ゼロ
- イ 1時間未満
- ウ 1時間－2時間
- エ 2時間－3時間
- オ 3時間－4時間
- カ 4時間以上

（集計に際しては、ア=0、イ=1・・・カ=5とした）

なお、調査は、記名式とし、回収率等も調べることにした。

（2）調査対象

4～5歳児を持つ親を対象に、都市部と郡部として、それぞれ富山市と八尾町の保育所を通してアンケート調査を実施した。

結果と考察

（1）サンプル

調査は、1994年1月から2月にかけて実施され、調査票の回収率は表-1のようになった。

	回収数	回収率 (%)
都市部	48	75.0
郡部	114	99.1
計	162	90.5

表-1 回収数及び回収率

郡部の場合は、保育所で回収に際して、催促するなどの手段を講じた結果、回収率は、99.1%という高率となったが、都市部においては保育所の入り口に回収箱を置くだけとしたためにこれよりも低い回収率となったものである。この結果から推測すれば、今後の回収率は、保育所を通しての委託調査の形式を取れば、70～80%程度と見込まれよう。

サンプルのうちわけは、男子が89（54.9%）、女子が73（45.1%）であった。

また年齢は、平均値が57.7月（約4歳10カ月）、範囲は46～70であった。

（2）調査項目の分析

Q101からQ304までの20項目に対する回答の平均値、及びSD値は表-2に示すとおりである。

Variable	Mean	Std Dev	Valid N
Q101	2.88	.94	161
Q102	2.90	.95	162
Q103	2.79	1.03	162
Q104	2.93	.95	161
Q105	3.25	.93	161
Q106	2.06	1.12	160
Q107	2.18	1.03	160
Q108	2.19	1.04	160
Q109	1.59	1.02	162
Q110	2.27	1.04	160
Q111	1.36	.92	162
Q112	2.14	.88	162
Q113	1.39	.87	162
Q114	1.70	.81	161
Q115	2.06	.95	162
Q116	2.43	.99	162
Q117	1.69	1.26	160
Q118	1.70	1.04	162
Q119	1.86	1.30	161
Q120	1.82	1.10	162
Q121	1.90	1.09	162
Q122	2.27	1.06	161
Q123	2.41	1.06	162
Q201FA	1.89	1.04	150
Q201MO	2.07	.96	157
Q202FA	2.29	1.05	149
Q202MO	1.72	.90	156
Q203FA	1.84	1.00	149
Q203MO	1.82	.94	157
Q204FA	.95	.89	149
Q204MO	.91	.74	156
Q205FA	1.46	.79	149
Q205MO	1.51	.71	156
Q206FA	1.30	.93	149
Q206MO	1.06	.87	155
Q207FA	1.50	1.08	149
Q207MO	.90	.76	157
Q301	.64	.75	161
Q303	2.38	1.44	159
Q304	.23	.80	158

表-2 平均及びSD値

本報告では、Q101からQ123までの質問項目に関する分析の結果について述べることにする。

まず、Q101からQ123までの23項目のすべての組み合わせについて相関を検討した結果、相互に相

関の高い項目をグルーピングして、次の4グループを得た。

I 社会的向性に関するグループ

- Q101 友だちはできにくいほうですか
- Q102 近所の人や先生などになじみにくいほうですか
- Q103 仲間に入るよりも、友だちのすることを見ているほうですか
- Q104 外に出るより、自分の家にいることが好きなほうですか
- Q106 憶病なほうですか

	Q101	Q102	Q103	Q104	Q106
Q101		0.70	0.71	0.45	0.39
Q102			0.63	0.40	0.29
Q103				0.40	0.44
Q104					0.30

表-3 グループ I の相関係数

II 情緒のコントロールに関する項目

- Q107 怒りっぽいほうですか
- Q115 ちょっとしたことでも不平を言ったりするほうですか

	Q107	Q115	Q116	Q118
Q107		0.55	0.49	0.31
Q115			0.50	0.38
Q116				0.55

表-4 グループ II の相関係数

Q116 わがままで扱いにくいほうですか

Q118 言い出すと聞かないほうですか

Ⅲ動機づけの強さに関する項目

Q109 負けず嫌いなほうですか

Q110 せっかちなほうですか

Q111 熱中しやすいほうですか

	Q109	Q110	Q111
Q109		0.39	0.44
Q110			0.21

表-5 グループⅢの相関係数

Ⅳ自律性に関する項目

Q120 出かけるときなど、せかされないと支度できないほうですか

Q121 テレビなど、放っておくといつまでも見ているほうですか

Q122 遊んだ後は、自分でだいたい片づけるほうですか

	Q120	Q121	Q122
Q120		0.37	-0.36
Q121			-0.21

表-6 グループⅣの相関係数

結果的には、情緒の易変性に関する項目と欲求不満耐性に関する項目は分離されず、グループⅡとして構成された。

これらの各グループから、SD値や、回答しやすさなどを考慮して、それぞれQ103、Q107、Q109、Q120の項目を代表として選び出した。

今後のフォローアップ調査においては、この4つの項目を子どものパーソナリティ特性に関する項目として付加することが望ましいと考えられる。

今後の課題

今後残されている課題は、子どものパーソナリティ特性を参考にしながら、親の養育態度について代表する項目を絞ることである。これらの心理発達の要因についてのいくつかの質問項目を決定することができれば、今後予定されているフォローアップ調査をより充実させることができるであろう。なお、今回の検討は幼児・児童を対象とした項目に関するものであるため、さらに年齢が高くなっていけばそれに対応した項目の変更が必要となろう。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:小児期からの健康的なライフスタイルの形成という問題においては、心理発達の要因についても考慮する必要がある。心理発達の要因とは、基本的にはパーソナリティ形成に関わる問題である。本研究においては、小児期において未だ形成途上にあるこの特性及びこの形成に重要な影響を及ぼす親の養育態度について継続的に研究、調査を進めていくための質問項目の作成を試みた。その結果、社会的向性、情緒的コントロール、動機づけの強さ、自律のそれぞれに関する4つの項目が作成された。